

いう情報の流れは、今日を予測した演出ではなかったか。なぜなら、毒ガスを製造したのは米国内においてであり、今回のように移送をレッド・ハット作戦と称してリハーサルまで試みた例は聞いたことがない。

しかるに、米軍支配を打破し、基地の即時撤去を切望する思想から、差別への怒りをぶちまける怒濤のような風潮は、まさしく正義の要請でありながら、直感的に、私は、何もかも一掃くたに捲き込んでしまうような大渦を感じてしまう。それはどういうわけか。民主体も合めて、恐怖を煽動するものに向こう側に、戦争を起こさせぬ威圧があるのか、何かの目的と準備があるのか。これへの明確な解答は、すぐには得られないかもしれず、恐らく徐々にこれから歴史が物語るであろう。

だが、更にマスタードガスについて思いを馳せるとき、報道によってばらまかれた恐怖の観念は、どのような観念形態に適用されようとも、喉元過ぎれば熱さを忘れることになりはしないだろうか。毒ガスについての事実はあまりにも知らなすぎるのだ。そして一方に、事故がない限り、つまり直接されるようなことがなければ、危険はないと発表した米軍の、軍事力が裏付けるものは、人類絶滅の錫極兵器の所持のある演出効果を、狙っていやしくないかという考えも湧いてくるのである。

いずれにしろ、解釈は賢明な諸兄諸姉におまかせするとして、毒ガスが沖縄戦でどのように使用されたかということ、その残忍にして愚かしい役得の、実例がここに挙げられてあるのである。

註、一九六九年十月二日に、嘉数の公民館で、戦争当時の区長

娘・フミエ 私は十・十空襲とは知らなかったんです。ただ裏のガジマルの木の下に隠れて、坐っていて、飛行機がとぶのを見たことを憶えています。あ、また飛んで行った飛んで行った、と見ていたんです。一応おさまって、また来たら大変だということで、静かになってから壕に行っただけです。

母・文 うちの長女(十七歳)は、勤労奉仕で屋良飛行場に行っていましたけれど、空襲の日には帰ってこないで、翌日の十一日の午前十一時に、帰ってきていたんですよ。もう居なくなつたのかと思っていましたけど……ぶるぶる震えて、どうしてここまで来たか判らないと、言っていました。

娘・フミエ この部落には日本の兵隊が沢山入っていました。私は兵隊さんとよく遊んだので、憶えていますけど、最初は武部隊で、あとから石部隊、球部隊が入ってきていました。

母・文 私の家は大きくなかったし、子供も五名いましたから、兵隊さんが貸しなさい貸しなさいと来ていましたけれどね、家族が多くて寝るところもないからね、大きな家に相談してみてください、と私は断ったんですよ。

兵隊さんたちは、さかんに嘉数高地の周辺に壕を掘っていました。最初のころは、部落の住民が手伝うと、テマ(手間賃)をくれたよったんですよ。

娘・フミエ 小学校では毎日のように退避の訓練をよくやりましたよ。二十年の三月になると、もう学校には行かず、終業式はなかったと思います。

母・文 三月二十一日が確か彼岸の入りで、二日目に、上陸前の

伊波正栄氏を含めた五人の方々に座談会をひらいて貰い、それだけの戦争体験を取材したのであったが、話の内容が類型にすぎず、また混乱して要領を得なかったもので、ここでは割愛させていただきます。

知花 文(三十二歳) 家事
知花 フミエ(十歳・二女) 小学生

母・文 私の主人は昭和十八年四月十三日に召集されて、鹿児島に行っていました。手紙は二回ほどきています。お砂糖(黒砂糖)を送りなさい、という手紙があつてまたその次に、タオルとフンドシを送りなさい、という手紙もあつて、小包を送ったら、それきり返信もなく、その後すぐ南方に行ったはず。それで、行ったきりです。

娘・フミエ すぐだろうと思うんですよ。なぜかといったらですね、戦死の知らせが、昭和十九年五月十五日に南方のブーゲンビルで戦死したということになっていましたけど、あの月日は信用できない、と思うんですよ。とにかく、返事を書く暇もなくすぐ南方に行ったはずですよ。

母・文 昭和十九年の十月十日の大空襲のときは、この部落にはほとんど爆弾は落ちませんでした。二、三発しか落ちませんでした。

嘉数部落の入口に崖があつて、あそこに百名ぐらい入る壕がありましたから、十・十空襲が終つてから、またも来るといふ噂があつたので、敵は来なかったのに、私たちは二、三日入っていましたよ。

大空襲がありました。そのときに、この家も最初に焼けて、部落のあちこちの家が焼けていました。

私たちは、屋敷内の防空壕に、書類やトウトウメー(位牌)などを入れてから、また食糧や着物や食器類など持てるだけ持って、チーフチャーガマに運んだんです。米やら砂糖やら味噌やら何もかも、何度が往復して、そのときの私の力は自分でも考えられないくらいですよ。七十キロ以上もある砂糖の樽を、抱きかかえて、壕の入口からお尻からさきにかがんで入って、運んだんです。

チーフチャーガマは、二、三百名も入る大きな自然壕で、入口はかがんでしか入れない小さい穴でしたけれど、中は天井も高く、頭に何か乗せて歩いてもつかないくらいで、細長くできていて、舟みたいな恰好になっていました。

そのガマは、部落のはずれの丘の中腹に、横穴になって、伊祖の方へ、ちょうど西側に向かっていました。

娘・フミエ 奥に入ったら、大きな洞穴ほらなになっていて、中には水がちよろちよろ流れるところがあつて、水には不自由しないし、最初、部落の半分以上の人たちがそこに入っていました。

母・文 三月二十三日からは、ずっと壕の中に入ったきりでしたから、外のできごとは何も判りません。二、三日したら、ものすごい音が、ゴンゴンするけれどね、ただもう恐くて、出て行けないからね、それが艦砲射撃なのかどうか判らなかつたですよ。

それからはずっと穴の中の生活で、チーフチャーガマの中は屋でも暗いから、最初の頃は石油ランプをつけていました。石油がなくなつて、あとからは、豚油を小皿に入れて、布切れを浸して、燃や

していました。

その頃になると、夜、出たり入ったりする人たちも多く、アメリカカーが上陸しているという話もあって、それだけの人たちが次々と荷物を置いたまま島尻へ逃げて去ってしまいました。だから、そんな荷物の中には、豚油もあったし、食糧にはそんなに困りませんでした。

小便や大便は、壕の中に肥桶こふたけを入れて置いてありましたが、それにしていました。最初の頃は、夜中に、外に出して捨ててしまいたけれど、後になってからは、壕の奥の方の少し窪んだ所にこぼしていました。

御飯は、七輪で炊いていました。薪は前の人たちが随分取って置いてありました。マッチはいつも大事にして懐に入れてありましたよ。そして私たちは、最後までチーフチャーガマに残っていました。残っていた人たちは、あっちこっちのおじいさんやおばあさんたちがほとんどで、それに女子供、私たちは主人のお母さんと子供五名と私で、合計三十名あまりでした。

娘・フミエ 私は三月二十三日頃までは、よく高台から西海岸を見ていましたよ。最初は、水平線に一本のマストが見え、それが沖の方からだんだん近寄ってきて、三本になって、翌日になるとどんどんマストが殖えてきて、軍艦がいつぱいになっていました。それから艦砲がはじまって、外に出られなくなって、ずっと外のことは何もわからなくなりました。

母・文 アメリカカーがこの部落に来たのがいつなのか判りませんでした。壕から出て、また戻ってきた人たちもいました。その舞

由しませんでした。

そしたら、入口と反対の方にある横穴から急に煙がたちこめて、目が痛くなって、喉も痛くなったので、催涙弾を投げ込まれたことが判ったんです。苦しくなって、みんな蒲団や綿入れなどを被って我慢していました。よかったことには、風通しのいいように両方に穴があいていましたから、しばらくすると煙も消えて、どうもなくなつて、ひと安心しました。

それからまた一週間ぐらいしてから、毒ガスを入れられたんです。入口の近くの墓の側には、友軍の炊事道具なども捨てられてありましたから、おそらくアメリカカーは壕の中に日本軍が入っていると思っただろうね、何日間も外で警戒して見張っていたのかどうか、廻ってくるアメリカカーによってやり方がちがっていたのか、とつぜん毒ガスを投げこんだんですよ。

入口は奥から二百メートル以上も離れているので、ちよつと声をかけても聞こえないんです。どの入口からだったのか、何かほんと鈍い割れるような音がしたかと思うと、もうなんの物音もしないで、ただ急に臭くなったような気がして、息苦しくなりました。すぐに私たちはまた何か投げ込まれたと感じて大変だと思ひ、あわてて蒲団を被るよう叫んで、みんな何かにもぐりこんだんです。

ところが、抱いている次男も、坐っていた三女も、うんともすんとも言わないで、眠ってしまつて、そのままなんです。

長男と長女は、前に一緒に一度壕から出て安波茶まで行って、戻ってきたとき、長女は破片で右足膝を怪我して動かすこともできなくなっていました。長男はいたって元気でした。だから私はあわ

戻ってきた人たちが、アメリカカーを見たと話していました。その頃は、星夜、激しい砲弾の音が聞こえていました。それから何週間も経って、砲弾の音が聞こえなくなってから、うちの長女と長男が島尻に逃げると言っ出て行って、すぐ帰ってきていました。長女は怪我してきて、前田の近くで戦争していたと話していました。

それから二、三日して二世がきたんですよ。それは毒ガスを入れられる少し前のことで、二世は壕の入口にきて、声をかけていました。ハワイに行ったことのある小母さんが出て、壕の入口で話をしていました。その入口近くには、日本軍が残した銃や日本刀がたぐさん置いてあったので、まだ中に日本軍がいると思つたらしく、そのことを訊いていたそうです。それから二世は、あんたがたは危険な所にいるから、安全な所につれて行ってやる、みんな出た方がいい、出なさい、と話しているけれど、どうするね、と小母さんが戻ってきて言うたらね、うちの十五歳になる長男が、アメリカカーの捕虜になるかと反対したんです。

反対する意見が出たもんだから、どうしようどうしようと相談しているうちに二世はいなくなつていきました。そして壕の外には、紙に二世が書置きしてあったんです。あんたたちの命は助けるから、殺しはしないから、そこで暮らしていなさい、という意味のことが書いてあったんです。そこで私は、安心しなさい、もう何も心配はないさ、こんなに書いてあるんだから、と子供たちに言い聞かして、御飯を炊いて食べて、そうしてどこにも行かずに四、五日暮らしていました。配給所の小父さんたちが残した米もたくさんあったし、砂糖も樽にあるし、味噌も甕に残っていたので食糧には不自

て側にあつたザルを長女の顔に被せて、そのへんにある着物や綿入れをあるたけうち被せました。そして私が、蒲団の中に入り込むとき、少し離れた長男が、おばあに向かつて、ここは危険だから家の墓に行こうかな、と言ったら、おばあさんが、こうしてはいけない行こう行こうと騒いでいるうちに、長男の幸一が、は、僕はいま倒れるよ、と一言いって倒れてしまったんです。次女のフミエだけは、蒲団の中で私の体の下の方へ下の方へ入りこんで、がさがさしていました。

娘・フミエ そのときは、何も燃えていませんでしたよ。ただ何か異様な匂いがして、相当のガスを私も吸っていますから、苦しくなつてきて、母の側でもがいていたことを憶えていますよ。

母・文 フミエは大変だと思つたのか、私の膝の下まで入りこんできていました。だから、これが押しやるもんだから、私の左手と左足が、蒲団からはみ出してしまったんですよ。それでもなんだかわくて、我慢して、じっとしていました。そのときは、手も足も、どうも感じなかったんです。痛くも痒くもありませんでした。

後で壕の外に出てから見たら、はみ出ていた左足の、腿のところから脛のところまで、青い斑点ができていて、また手の甲は水脹れになって腫れていました。それは後で判ったことですが、手は毒ガスにあたつて腐りかけていたんです。

毒ガスを投げ込まれてから何時間が経つてから、ようやくガスが両方の入口から抜けてなくなつたようでした。私は子供たち四人が死んでいるのを確認して、そのまま寝かして、生きている人たちに誘ひ、そしてフミエの手を引いて壕から出たんです。

そこに三十名あまり入っていましたけれど、九名しか生き残っていませんでした。

外に出るときは、ただ体がだるいだけで、どこも痛くもなかったんです。外は昼の光で明るかったから、日中のできごとだったようです。

娘・フミエ 私は喉をやられて、声が出なくなっていました。それから一か月ぐらいずつと声は出なくなつて、声が出るようになってのはいつ頃だったか、よく憶えていません。

後で捕虜になつてから、トラックに乗せられて、母は重傷者として呉屋でおろされ、私は美里の焼跡の収容所につれて行かれたんです。そこにはあつちこちからきた捕虜がたくさんいて、私は一人でしたから、嘉数出身のおじいさんとおばあさんに引取られていました。おばあさんが面倒をよくみてくれて、私が話をしないもんだから、声が出なくなっている。大変だと心配して、豚油に塩をまぜて、それをいつも舂めさせてくれたんですよ。そうしたら、だんだん声が出るようになったんです。

母・文 表に出てみたら、部落には誰もいませんでした。弾も飛んできませんでした。悪い夢から醒めたみたいでしたけど、もう五月に入っていたらと思うます。前線は、首里の方面ではなかったでしょう。砲弾の音は遠くの方でしていました。それから私たちは、身のまわりの物だけを持って、ゆっくり歩いて、部落内の桃園の防空壕に入ったんです。

その防空壕には九名入っていました。食糧もないし、いつまたアメリカがきて、毒ガスを投げ入れるかもしれないと思い、私とフ

ミエは草色の木の葉の模様のついた擬装服を着ていました。

母・文 私たちはそれから部落のはずれの広場につれて行かれ、そこに坐つて休んでいました。そしてそのへんの畑からなんでも取つてきて食べてもいいということだったので、私は畑からイモを取つてきて、娘と一緒に食べたんです。

娘・フミエ 部落の一番西側の道路にトラックが停めてありました。そこは、私たちの壕から百五十メートルぐらいしか離れていませんでした。その側の広場で一時休憩していましたが、そのとき、アメリカカーがチーズを食べなさいとすすめましたが、石鹸みたいで食べられないと思い、受取らなかつたんです。

それから間もなく、トラックがきて、私たちを乗せてコザの方へつれて行つたんです。

母・文 コザの呉屋には、アメリカカーのテント小屋がたくさんあつて、そこは野戦陸軍病院でした。私たちは、三人だけトラックから降ろされたんです。十歳ぐらいの背中を破片でやられた少年が一人、もう一人は四十歳ぐらいの中年の女の人でした。少年は二十日間ぐらいして、テスト手術を受けてから死にました。毒ガスでやられたものは私一人でした。

私の手は水脹れがつぶれて、半分腐つていて、十日目に出血がはじまつて、その出血が二日経つても止まらなかつたんです。沖繩娘が看護婦をしていました。その娘がある日、おばあさんの手は出血が止まらないから、血の筋を結ぶ手術をするんですよ、と言って別のテントにつれて行つたんです。そこでは、白い服を着たアメリカカー

ミエは一日いてからそこを出て、夕方、島尻に行こうと思つて首里の方に向かつて歩いて行つたんです。

当山の部落にきたら、テント小屋があつちこちになつていて、また焼け残りの民家にも、電灯がついていました。アメリカがいるよ、とフミエがいうので、大変よ見つかつたら、と注意して急いで通りぬけて、当山から前田の部落に出て、前田を少し過ぎたら、農道にさしかかつたとき、とつぜん迫撃砲なのか砲弾がピュウピュウとんできて、私たちの方も弾が落ちて、その破片が私の腰にあつたので、私は転んで、血がたらたら流れ出るのを感じながらも、私はフミエをつれて、もう大変だと思つて、その晩のうちに引返して、また元の防空壕に入ったんです。

桃園の壕に帰つてきてからは、すっかり私の体は衰弱してしまいました。このままだと死ぬしかないと思つていました。そして二、三日したら、アメリカカーが銃を持って、来たんです。防空壕ですから、逃げ隠れもできませんでした。すぐみんな壕から出る気になつたんです。ちようどハワイ帰りのおじいさんも一緒にしたから、片言の英語でアメリカカーと話をして、殺さないということになつて、私たちは壕から出たんです。私たちは七名でした。もう五月中旬になつていただろうと思います。

外に出たら、じきにアメリカカーが五、六人寄つてきました。ハワイ帰りのおじいさんが話をして、友だちになつてからに、アメリカカーは牛罐やらチーズやら食べなさいと私たちにすすめていました。でも、毒が入つていると思つて食べませんでした。

娘・フミエ 私は壕から出てアメリカカーを生まれて初めて見たと

がきて、私の顔にガーゼを被せて、アースをまくようにして麻酔をかけて、すぐに私は眠つてしまいました。後は何も判りませんでした。朝の九時頃出て行つたんですけど、その日の夕方五時頃になつて、やっと目が覚めたんです。そしたら私の左手は手首から切られてなくなつていて、ギブスを嵌めてありました。そのときは、もう水が欲しくてすね、死んでもいいから水を飲ましてちょうだいと叫んだりしたんです。

私が最初に入院したテントは九号でしたけれど、手術後は十一号のテントに移されていました。そこで約一か月ぐらい入院生活をしました。

そこから、久志ぐわの病院に移動させられて、一日だけいてから退院して、久志ぐわの病人班に入れられて、そこに二、三週間いました。そこから石川の従弟のところへ引取られて、翌年の四月頃、宜野湾の野嵩収容所に移りました。そして従弟が娘のフミエをつれてきてくれて、約一年ぶりで逢うことができたんです。

娘・フミエ 私は美里の収容所で嘉数出身のおじいさん、おばあさんと一緒に生活をしていました。そこには五月の中頃から翌年の四月頃までずうつといました。一つ山を越えたら、東海岸に近い前原というところがありました。

前原には、叔母さんがいましたから、一度私をつれてきていたんです。そして前原に行つたら、叔母さんに、きたないから風呂に入つて服を着替へなさいと言われ、よごれた着物を脱いで洋服に着替へさせられたんです。そしてここにずつといなさいとすすめられたんですけど、私は美里のおじいさん、おばあさんのところがいい

いと言つて断つて、戻ってきたんです。でも、ときどき行きたいときは一人て山を越えて、前原に行つたんです。

美里の收容所の周囲は小高い丘になっていました。美里の本部落だと思ふんですけど、ちゃんとした家が残っていました。そんな家には味噌とか米とか砂糖が台所に残っているというところで、大人たちはみんな取りに行つていました。また近くには、日本兵の捕虜收容所がありましたよ。そしてですね、山からときどき敗残兵みたいな日本兵の生き残りが、私たちのいる所へおりてくるんですよ。一度は、那覇出身の防衛隊が下りてきて、私たちの家に入れて貰つて、こっそり生活をしていました。私たちは六畳に七人いましたが、別に邪魔ではなかったんですよ。ところが、その防衛隊はアメリカに感づかれて、引張られ、日本兵の捕虜收容所の金網の中に入れてしまいました。

母が呉屋の病院にいたことは知っていましたから、いつかは逢えると思つていました。

そうしているうちに叔父がやってきて、母は叔父が引取つて野嵩にいたことを知らせてくれました。叔父は私をつれにきていたんです。そして叔父と一緒に歩いて行つたんですけど、遠くて、呉屋の病院まできたら、私は疲れて歩けなくなっていました。叔父は通行証を貰つてきていましたから、ゲートのMPに野嵩まで車に乗せてくれないかと、頼んだんです。そしたらMPは、四時まで待つならつれて行つてやると答えたそうです。歩くよりは待つて車に乗せて貰おうということになって、暇つぶしに病院のテントの中を見学したりしました。捨てられた赤ちゃんや両親を亡くした赤ちゃんや生

まれたばかりの赤ちゃんがたくさん入っているテントがありました。そして四時になったら、約束通りMPはジープをもってきていました。MPは野嵩の入口まで私たちを運んでくれました。

母・文 私は捕虜になったときアメリカを見て、ああ日本は敗けたはずとすぐ思いましたよ。

娘・フミエ そういえば、捕虜になって美里にきてからも、私は日本の特攻機を何度も見ました。特攻機はきまつて一機ずつ、ときどき東海岸に現われましたよ。見えるんですよ、丘になっていきますから、海のかなたに一機、特攻機があらわれたら、すぐアメリカの飛行機が十何機もがアーとあらわれて、みるみるうちに、あらわれてはやられ、あらわれてはやられしていました。昼ですよ、たつた一機が泡瀬の沖の方からくるんですよ、そしたら、すぐに燃えて海に墜ちるんです。あ、また来て、どうせ死ぬのに、もう来なければいいのに、と私は子供心にもそう思っていました。

中 城 村